名誉会員追悼

故　名誉会員　小田助男　殿

社団法人日本鉄鋼協会名誉会員、元住友金属工業（株）副社長、小田助男氏は、平成18年2月13日逝去されました。享年96歳。ご逝去の報に接し謹んで哀悼の辞を申し上げます。

氏は昭和7年3月、京都帝国大学採鉱冶金学科卒業後、同年4月住友金属工業（株）の前身である住友伸銅鋼管（株）に入社されました。その後、鋼管製造所製造部長、同所副所長、鋼管製造所長、和歌山製鉄所長を歴任し、この間取締役、常務取締役、専務取締役を経て、昭和43年には同社副社長に就任、その後、相談役等を歴任されました。

氏は住友金属工業（株）に入社以来、鋼管製造の技術開発とその指導育成に心力を傾注し、日本有数の製鉄所を建設するなど、鉄鋼業の伸長発展に多大の貢献をなし、その業績は世界的に高い評価を得ています。戦後経済復興の一翼を担った日本の鉄鋼業の輸出においては、石油業界で使用される油井用継目無鋼管に着目し、幾多の生産技術の改善開発を計り、優れた品質保証体制と製品の信用を備えた製造メーカーに与えられる米国石油協会のAPIモノグラムを我が国で初めて取得しました。また同協会は氏の技術とたゆまぬ努力を評価し、API規格委員会の日本代表委員の就任を要請、昭和38年より10有余年にわたりよく重責を果たし斯界に貢献しました。

氏は高温高圧下における大容量火力発電所、石油・石油化学分野での特殊鋼管の製造に力量を発揮し、従来法では困難なステンレス鋼管などの製造に仏国CIEP社のユジーンセジュルネ法を昭和34年に導入、潤滑法など製管法の改善に心血を注ぎました。これらの功績により、昭和46年仏国よりレジオンドヌール勲章を受章されました。

氏は溶接管分野においても大きな足跡を残しました。即ち米国アラスカ北極海岸の大量の原油をアラスカ南岸へ1280kmにわたる長大パイプラインで輸送するプロジェクトに対応し、これら酷寒地に耐える高強度の大径溶接鋼管を製造しました。その量は30万トンを数え、日本の鉄鋼技術の秀逸さを海外に示し名声を博したばかりでなく、その後の制御圧延法の発展の礎石を築きました。

氏はまた鉄鋼業の経営面においても能力を発揮し、日本経済復興と鋼材需要の増加を見込み、製鉄所の建設を決定する工場建設計画、用地、工業用水の確保から港湾の建設に至るまで幾多の障害を克服し和歌山製鉄所を建設しました。さらに一層の鉄鋼需要の増加への対応と国際競争力を備えるため設備の高度化、近代化を計り鹿島製鉄所を完成させました。これら二大臨海製鉄所の誕生は氏の力強い指導力によるところが極めて大きいものでした。

かかる業績により、本会にあっては昭和46年に理事、昭和45年から2年間は関西支部長をつとめました。また、昭和28年に香村賞、40年に製鉄功労賞、47年に渡辺義介賞を受賞され、昭和61年には名誉会員に推挙されました。一方、国家より昭和39年に藍綬褒章、55年に勲二等瑞宝賞を授与されました。

氏が鉄鋼技術と本会の発展に尽くされた多大なご業績を偲び、会員一同、心からの哀悼の意を捧げ、謹んでご冥福を祈ります。

平成18年2月
日本鉄鋼協会　会長　奥村直樹